



日文 701466171

104283

日本古典文學大系
64

春色梅児譽美



岩波書店刊行

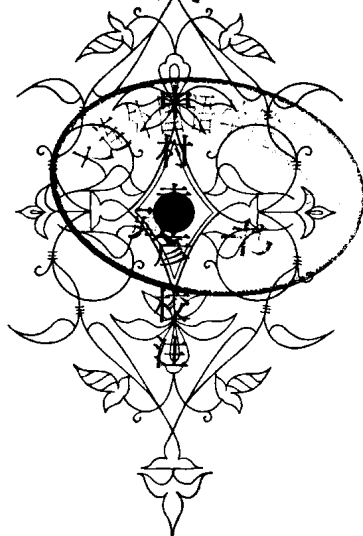


日文 701466171

104289

日本古典文學大系
64

春色梅児譽美



岩波書店刊行

昭和 37 年 8 月 6 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 3 月 10 日 第 13 刷 発行

定価 2100 円



校 注 者 なか むら ゆき ひこ
 中 村 幸 彦

 東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 2-5-5
発 行 者 岩 波 雄 二 郎

 東 京 都 青 梅 市 根 ケ 布 1-385
印 刷 者 白 井 倉 之 助

発 行 所 東 京 都 千 代 田 区 株 式 岩 波 書 店
 一 ツ 橋 2-5-5 会 社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解 說	四
凡 例	壹

春色梅兒譽美	元
--------	---

初編 卷之一（第一齣・第二齣）	四
-----------------	---

卷之二（第三齣・第四齣）	六
--------------	---

卷之三（第五齣・第六齣）	六
--------------	---

後編 卷之四（第七齣・第八齣）	九
-----------------	---

卷之五（第九齣・第十齣）	二〇
--------------	----

卷之六（第十一齣・第十二齣）	二三
----------------	----

三編 卷之七（第十三齣・第十四齣）	二七
-------------------	----

梅曆
餘興

春色辰巳園

..... 三六

初編 卷之一(第一回・第二回)..... 三四

卷之二(第三回・第四回)..... 三六

卷之三(第五回・第六回)..... 三七

後編 卷之四(第七回の上・第七回の下)..... 三九

卷之五(第八回・第九回)..... 三八

卷之六(第十回の上・第十回の下)..... 三三

三編 卷之七(第一條・第二條)..... 三七

卷之八(第三條・第四條)..... 三八

卷之八(第十五齣・第十六齣)..... 一五

卷之九(第十七齣・第十八齣)..... 一七

四編 卷之十(第十九齣・第二十齣)..... 一七

卷之十一(第二十一齣・第二十二齣)..... 二〇

卷之十二(第二十三齣の上・第二十三齣の下・第二十四齣)..... 二三

卷之九(第五條・第六條)……………三七二

四編 卷之十(第七條・第八條)……………三八五

卷之十一(第九條・第十條)……………四〇九

卷之十二(第十一條・第十二條)……………四二四

補 注……………四四一

諸本對照表……………四五三

付 圖……………四六一

解説

一

為永春水は逆算して、寛政二年に生れた。後年自ら述べる所によると、姓は鷗鷯(佐々木のあて字であろう)氏、名は貞高(増補外題鑑叙など)、通称を長次郎という。それ以外は、父母や出生地など多くは不明である。ただしかの花暦八笑人の著者滝亭鯉丈こと池田八蔵を、「家兄」(菊廻井草紙三編)と称し、方壺堂玉枝は、かえって、彼を、「おぢ」(処女七種四編序)と呼ぶ。その関係は従来も問題になって明らかでないが、婚姻関係と見るのが、最も自然であろうか。これらから見て、江戸の町家の産であつたらしい。玉川日記五編の、珍奇楼主人の端書に、春水をさして「嗚呼つがもなき根生の江戸ッ子」と言っている。

春水の経歴の不明は、日次の確実な資料の上では、出生から、文政三年三十一歳頃、為永正輔(花暦八笑人初編)と号する講釈師として、まがりなりにも寄席に上る時まで続く。文化十二年初刊の松風邑雨物語前編の出版者連名の中に、彼の書肆としての、越前屋長次郎の称を認めるが、これは後刷の時(恐らくは同書後編の出た文政十年頃)の奥付である。文政元年二世南仙笑楚満人と号して、滝亭鯉丈と共に、明烏後正夢を著述したという菊廻井草紙三編の序の記事は、或は春水の誤算かとも思われる。しかし文政三年以後は、漸くに資料も多く、不明の期間も、かすかではあるが、想像されないこともない。文政三年に、振鷺亭のいろは醉故伝が、時代建久水滸伝と改題して再版されるが、それには堤下市隠三鷺の補正によると見える。この三鷺は、春水自ら「三馬先生の門下に連り、三鷺と呼ばしなまけもの」(浮世床三編序)とい

う彼であると思われるので、何時の年か不明ながら、これより先、式亭三馬の門に出入していたことになる。更に、

其身の上のあらましを、いはばかたらば衣売^{きぬうり}し頃より一向書好む、道は稗官小説の編文漢^{さくしや}の真似も台下麓^{したや}の里、柳亭大人が東軒に、燕の如く唄りて、趣向の巢作る事をしも、主人の恵みに覚へしは嘘じやござらぬ本町の嘸囉哩棲へも再々^{しばしば}登り、式亭大人の鈴ふりと、活業半分筆取れど(明烏寢覺線言初編の文亭綾継序)

によれば、呉服屋らしいこともやったし、柳亭種彦の助手をやったことも、三馬入門前後にあったこととなる。世業に従事しながらも、有名作者の門をくぐったのは、少年期からの、その為^{ため}に甚だしい近視眼になったとも伝えられる程の、仮名物語物の本の耽読のはてであった。ついでもって言えば、少年時の小説愛読を語る閑窓瑣談には、「狂歌を得詠ず、俳諧発句の集など看る事稀にして、一首一句を言つらぬる所為は猶更に拙し」と自ら述べている。

しかし寄席に出たのも、思いつきではなかった。これも彼生涯の志向の一つであったからである。恐らくは怪談ばなしの創始者初代林屋正蔵の手引で、その「正」の一字をもらって、文政三年正月前後にデビューしたのであろうが、彼は落語家ではなく、世話種を専門とした講釈師としてであった(月報所収拙稿「舌耕文芸家春水」参照)。この度の寄席出演は数年にして中止したと見えて、文政九年(三日月阿專序)には、「昨烏^{きの}は講釈師の為永とよばれしも、今兎^{けふ}は編文漢^{さくしや}の楚満人と改め」の記事が見える。数年ではあったが、彼の舌耕文芸への関心と、この期における経験は、後に人情本作者たる彼に、様々のものを与えたと思像する。当時の寄席界は、落語では三笑亭可楽の高弟達相競って、新風を打立て、講談界では、従来の行儀のよさを捨てて、完全娯楽としての姿勢を示し始め、伊東・田辺など諸派漸く繁盛し、色物も亦多彩、幕末から明治へかけての最盛期めざして、上昇気運につつまれていた。殊に落語界は、烏亭焉馬^{うていゐま}らの文人落語の洗練さを受けて、娯楽性を濃くした可楽の流れにあり、写実的な生世話物の芝居の影響を蒙って、その話術は写実の妙を甚だ加えて来ていたと十分に想像できる。一方で三馬門に、写実的滑稽本の筆を学び、講談とはいえ、世話種を専門とした正輔が、落語話術の影響を受けなかったはずはない。春水がこの期に舌耕文芸界から得たものの第一に、この

話術からのものをあげよう。全国の青年男女の魂をあやしくゆすぶった、信夫恕軒・依田学海・菊池三溪などの漢文章家を三嘆せしめた、自由な会話文は、舌耕文芸家としては失敗に終る彼の、この期の経験が生んだものであった。第二に、該界の友人の中に、たとえば桜川連の太鼓持たちの如く、寄席にも上れば、花柳界にも活躍する遊里通を得ることができた。遊びに暗いという彼の告白は事実であろうが、それでいて、悉く花柳界にわたるといってよい人情本を著述することを得たには、その人々は最もよい知識源であったはずである。第三に、当時の寄席に出ていた様々の音曲の知識を得た。人情本試作時代というべき文政年間の作品から既に、寄席芸人の名と共に、様々の音曲があらわれる。ここに得た知識は、人情本の情趣構成に役立っていることはいわずもがなである。また、あらゆる点で、彼の著述の最良の補助者であった清元延津賀との会合も、寄席における機会においてではなかったかと想像している。

二

舌耕文芸家としての出発はしかし、彼の作者志望を放擲させはしなかった。文政四年刊の三馬門の故友、春亭三暁の遺稿、十種香萩廻白露に、二代目振鷺亭主人の号で序を送ったのは、後年「為の字さる」と称するその印章のすわる所から、春水であることが判明する。この執筆をすすめたのは、前出の堤下即ち柳原土手の近く豊島町一丁目で、春水と家を隣っていた(総角結紫総糸序、そして生涯の著述の伴侶となるべき浮世絵師歌川国直であった。がこの号での執筆は、今の所この一例しか見出せない。直ぐ続いて二代目南仙笑楚満人の号があらわれるからである。その間の事情について、綾継の前掲の文は続く。

天性の閑好漢殊に廻らぬ才力は、牛馬におくれべく、拙き智工は竹田が機関を、添るとも猶働き兼べし。かゝれど心の老実と、氣億の克きを三馬翁も、愛て教の一喝にさめて見果し浮世の栄枯、其一睡を狂言綺語に、つづり合せし正夢の、幸ひにして流行せるは(後略)

と。これによると、三馬の教訓の忠告、怒りっぽい三馬のこと、本当に一喝であったかも知れないのだが、それが春水の一転機となったのである。三馬の教訓の内容を想像するに、春水の才能は三馬の如き滑稽本や読本にはない。作者となるなら、草双紙や、漸く十返舎一九や東里山人の試みはじめた世話種の中本読本に進めとあったのであろう。春水は洒落本と読本作で、かなり令名あった振鷺亭の二世の号を、専ら草双紙の作者であった楚満人の二世にかえたのであるが、これを三馬の教訓の直後と見ると、話は恰好につながるのである。二世楚満人の号は、現在では文政四年の年次をもつ明鳥後正夢初編と、同年の序をもつ同二編の巻頭に、「江戸 南仙笑楚満人、滝亭鯉丈合作」とあるを初見とする。

前出した、文政元年楚満人と号したという、菊廻井草紙の自説との説明がつかないが、今はそのままにしておこう。その後、文政十一年春水と改号まで、この号を使用し続ける。明鳥の書は、後述する如く、世話種の中本読本であった。

楚満人と改号したと殆ど時を同じくして、出版業を始めた。文政四年の明鳥初編では、それまでの住所、豊島町一丁目で、同じく同年刊の櫟亭金魚著の刀筆青砥石文では、近くの本町通東へ入橋町二丁目へ移転して、青林堂、越前屋長次郎と号した。これは、戯作の一方に、真面目な生業を持った師三馬に学んだのであろうが、ここに到るには、彼に長年の努力があった。玉川日記二編（文政八）の多満人の序に、

本のせどりの担商、（中略）不断脊中に包袱を放たず、昼は足^{すくぎ}を雷木にして、江戸中を欠廻り、夜は筆をさゝらにして、机と首引をなし、螢や雪はあつめねど、夜をもて日につぐ夜学燈、其功積つて忽に燈四の油街に、くゝりざるの暖簾を返翻とひるがへし、書林の郵^{みま}をひらく（下略）

と。本のせどりを業として江戸中をかけ廻った何年かがあったのである。恐らくは前述した呉服をあきになった後、作者を志した一方で、職を転じたものであろう。せどりとは出版書肆と小売屋、または素人の需給の間の仲介業であるが、文亭続継や琴通舎英賀など、春水のひいきとなった文人との接近は、この業の間のことと想像している。春水はまたこの間、読者の嗜好方向や書肆経営の大略を察することが出来た。出版業とはいえ、どうせ僅かな資本でのこと、多くは、

著名な老舗の中に名をつらねる形で営業した。読者の動きを知る彼の参加が、老舗側にも何がしかの利益があったかも知れぬ。それでも、文政五年の明鳥三編には青林堂蔵板目録なるものを掲げた。計十一部。馬琴の勸善常世物語を除けば、他は三馬・一九の小冊滑稽本のみ（それも出版されたものは、連玉堂との合梓になっている）。彼の資本では当然だが、努めていることは推察できる。文政七年には馬琴の三国一夜物語を無断で再版して、あしざまに言われることもあったが、自分の関係した著述の中本類は、自分の店が中心となって出版する。文政七年の例をとると、瀬川如阜の^{俊蘇}義仲鼎臣録二編の、かなり出来上りのよい読本を始め、八重霞春夕映二編など数部の中本読本、八笑人三編追加など数部の滑稽本に大寂庵立綱の萍の跡の版を買入れ、淡海隨筆と改題したもの、例の三国一夜物語を加えて、十部以上のものを新刊している。この年のこの数は大出版書肆並である。

文政十一年の彼の著述、風俗女西遊記・浦島太郎珠家土産・^{美談}春宵臘月夜四編・婦女今川などは一様に、橋町から程遠からぬ通油町に転じて、人氣俳優岩井桑三郎（後の六世岩井半四郎）の紋所を使用した、岩井梅^{うめ}我齒磨すなわち丁子車の売出しを広告した。この前後、青林堂の名を持つ新版は次第に少いことを見れば、書肆の一方、化粧品をあきない始めたには、春水の心境の変化があったからであろう。舌耕文芸家・出版業・作者と三本立で始った春水の、中年の奮起も、先ず舌耕文芸家をやめた。多忙と不評がその原因に数えられる。残った二つでも、やはり多忙であって、後述する如き作者としての不評をかった。ここで作者・書肆いづれを主にすべきかの二者択一、春水は年来の希望たる作者道を選んだのである。書肆は消極的な営業にとどめ、かわりに三馬の故智を学んで、彼の手を多く必要としないであろう化粧品の製造を兼ねて、作者生活の後顧のうれいなからしめんとしたのである。作者道を選択した彼の決意を証明する如く、翌文政十二年には、為永春水と改号して、一本立の作者宣言を行うのである。けれども好事魔多しで、折角の通油町の丁子車精製所も長く続かなかった（この齒磨は後々も作っている）。文政十二年三月十一日の神田から出火した大火事で、この一帯は灰燼に帰した。文政十三年の寢覚線言三編の奥付には「通油町越前屋長次郎」の名をとどめるけれども、実際

の青林堂はここで終止符を打つのである。春水は一時、根岸の里の茅屋に引込み（絵本荒川仁勇伝序、天保の初年に浅草寺中に移って、閑居をせざるを得なくなる。文政三年の奮起以来、幾曲折、嘗々として自己の路を拓いて来た春水の心境は、春色梅児誉美（天保三）の序に「願ふ心の十方ぐれ、八方金神の中央に、座したるこの三四年の災厄」の語で示されている。

三

彼の作者としての出発は、文政四年、鯉丈との合作、明烏後正夢であったことは前述した。この書は、後に人情本と称される様式の先駆作の一であるが、当時は中本と称された。中本の読本の意である。また中形絵入よみ本などの称もある。その後、この明烏が編を重ね、寢覚繰言と題をかえて、続編を出す好評もあって、春水が文政年間、最も多く作ったのは、この中本様式のものである。

元来、馬琴の里見八犬伝や椿説弓張月を代表とする半紙本型の読本は、遠くは寛延年間、近くは寛政頃からの歴史を持って、時代物長編小説として、表現・内容・構成に一定の型を形成して来た。そして、当時の小説中、最も教養の高い読者を予想したものである。それに対し、中本の読本は、安永頃から断続的であるが、脈を引いて、この頃に至った。その中では、滑稽な作、草双紙的で読本よりは教養の一段低い一般読者を予想した平易な表現の作、雅文小説など、半紙本読本の規格をはずれた、作者の自由な試みがなされている。洒落本が末期に至って、うがち専らの作風から、筋と涙による新傾向を求めた時に用いたのも、大ごんにゃくなどと称されるが、実は中本の読本の一つなのであった。要するに、読本の筋と道理と、美文的表現と、変幻と変転の作風の中へ、異質であるべき洒落本・滑稽本・草双紙、時には中国の世話小説や歌舞伎浄瑠璃種まで、あらゆる様式の内容・表現の流れ込んだものが、中本の読本である。その上、中本読本を多く作った十返舎一九に明瞭な傾向であるが、読本の時代小説なるに對して、世話小説をここで試みた。文

政に入ると、洒落本は勿論、滑稽本も、馬琴一人を残して読本も、皆マンネリズムに落入って、読者からあきられて来た。何か新しい試みが必要とする小説界へ、目先のきく一九が出した試案であったが、東里山人これに応じて、一言で言えば、当時の小説界は世話読本誕生の気運をはらんでいたのである（拙著近世小説史の研究所収「人情本と中本型読本」参照）。

明烏後正夢は、その序に「不_レ戴_二彼新奇妄誕_一、而_レ尽_二人情世態_一」とあって、世話読本たるを明示したものであるが、更に題名も同じ新内節をその題材としている。勿論、新内の主人公達の不運の中の悲劇と、その節の哀婉の気味を、移し入れようとしたのである。この作の好評も、実に読者のこの点への共鳴に原因する。よって春水らは、次いで、藤枝恋情柵（文政七）・袷妻雪古手屋（文政七）と、新内による作をしきりに出した。富本節に材をとって好評を得た軒並娘八丈文政七も、この一群である。春水らは、この哀婉の悲劇的作品を泣本と称した。また、愁歎本（菊廼井草紙三編）ともいう。式亭三馬が筆力にて、気障な文句の泣本を鼻うちかませて止させしに、近年亦々泣出して、心気辛苦の愁歎場、（中略）郷に入ては郷に従ふ、泣本流行ば、泣本の其流俗に従ひ給へ、泣が不洒落かうれるが洒落か、と自己勝手な発客の、詞に従ひ採筆は、例の拙き物語（文政七、芦仮寝物語序）と、述べている。

二世楚満人と号してみても、三馬が見極めた才能のなさで、たとえ泣本といえども、すぐに自由に執筆出来ることではない。他の作者との合作、または楚満人校正の形で他人の作をもとにしたものが多い（国文学研究十一輯所収、神保五弥氏「二世楚満人作人情本についての疑問」同氏「梅兒譽美まで」。書肆や舌耕文芸家としての多忙が、彼をしてこの方法をやむなくせしめたこともあったろう。好評の娘八丈も、その序文によれば狂言作者、二代目瀬川如皐の作である。文政五年青林堂から鼎臣録を出した如皐とは、直に契約が成立したと見える。文政八年の霧籬物語は玉川亭調布稿本楚満人閱とある。調布はまた狂言作者、松島半二の号。婦女今川（文政九）も、楚満人校で、某人の作という。内容か

ら見て原作者は芝居関係者らしい。文政六年刊の全盛葉名志をはじめとして、文政中を通じ、お互に著者となり校者となり合つて、春水と合作したのは、楚満入門人と称する駅亭駒人であるが、この人も、春水の素人芝居附立帳に「予が莫逆なる浜村助(輔)(号三折魚庵、又云三駅亭)」とある狂言作者であつた。考えれば、世話狂言の発達した当時、「芝居の作者はさまで文学もいらず、只氣をきかせて当世の流行をしり、よく人情世態を見るを第一のこゝろがけとす」(素人芝居附立帳)る狂言作者は、世話読本には、最も適した作者であつたろう。そして彼らの根本式な作品に、三馬や種彦の助手をして覺えた小説的体裁を与え、表現を整えるのが、春水の役だったと見てよい。また未熟な素人の作品を添削して出版することも、この頃の作者兼書肆としての彼の仕事であつた。岡養拙庵の読本、忠孝比玉伝(文政八)、桃山人の中本、涼浴衣新地詠織(文政十)、業亭行成の中本、歌舞妓詠織糸廼志良辺(文政十三)が、その例である。春水ひいきの一人文亭綾継なども、この方法で春水に援助させたかも知れぬ。彼も剪燈新話をもとにして、糸桜形見劔(文政十)を出刊した。はては春水自ら「諸作校合取次所」(箱根草初編序)と肩書するに至るのである。

しかし中には春水単独の作も勿論あつたろう。天保十年頃かと想像される文溪堂こと丁子屋平兵衛の中形絵入よみ本之部目録は、明鳥後正夢四・五編を駒人の作、玉川日記四・五編を松亭金水校、拾遺の玉川前後編(文政十二)を狂訓亭真作とするなど、中本作者の内実を知つたらしい記載を見るのであるが、為永春水または楚満人作とするものに、玉川日記初編(文政八)・明鳥後正夢二・三編(文政四・五)・園の雪三勝草紙(文政八)・松竹梅三重盃(文政年間)などをあげている。

合作し校正し、勿論自作する間に、彼の特色も次第に生れてくるであらう。友人花笠文京(素人芝居附立)は、拾妻雪古手屋後編の序で、「今後帙三冊稿成て予に授ず、一校畢て嘆て曰、読本でなく歌舞妓にあらず、元来一家の文体は、楚満一流の深山の桜」と称した。前述した中本の読本のうちに混在する、諸様式の特色を合せて、渾然たる一風を、春水が作り出したつことを示す文辞である。その外、他の人々に比して教訓的な態度も目立たぬでもない。彼自らも意識していたのであつて、文政七年の菊廼井草紙初編には、晩年も用いた勸善堂の号が既にあらわれ、同年の仮宅の文章に

は、この後長く使用する狂訓亭の号も見えている。かく教訓味の強いのは、彼の読本作者への一種のあこがれと模倣とによるものであった。

中本の読本以外に、当時の作者の常として、初代楚満人のように、この期の春水は、合巻をいくつか書いた。前述の総角結紫総糸や、帰咲古郷錦絵(文政八)の如く、音曲による、いわば中本読本の合巻化も若干あるが、繫馬七勇婦伝(文政九)・風俗女西遊記(文政十二)・愚智太郎懲悪伝(文政十二)が、水滸伝や西遊記により、浦島太郎珠家土産(文政十二)の小さい作も、小説精言所収の転運漢によるなど、中国小説の合巻化をししばしば試みた。当時の合巻界を見渡せば、これは滝沢馬琴風の行き方である。作者を志望する春水の念頭には、常に馬琴が意識されていた。従って作者たる以上は、読本の大作を残したいのは、振鷺亭と号した始めから、終生願望するところであつたと思われる。春水に読本作者たるを中止させた師三馬は文政五年に没した。そのためかあらぬか、読本著作の念は発して、文政九年刊行物の中には、京伝の梅花水裂(文化三)の続編、絵本梅花春水や、三馬当人すら馬琴に悪評された阿古義物語(文化七)の拾遺を二世楚満人作として見出す。馬琴の如き秀才が、おのれに乏しきを知る春水としては、続編とは上手な思付であつた。その後、何か実録に種がある幼婦孝義録(文政十)・絵本荒川仁勇伝(文政末)を、ともかく自分の名を加えて出したが、やがて里見八犬伝に抗して、^{大内}大内十杉伝を文政十三年から書き出す。その他、^{新田}新田水滸伝(文政十三)や、人情本の好評を得て多忙になった後も、^{尾形}尾形七国士伝(金水と合作、天保四)・^{功臣}新田柱石伝(天保四)など、いわば八犬伝風のもので、落を取ろうとねらったが、一つも成功したものなかったことを附言しておこう。

中本にかえて、前述した多忙の彼の著述ぶりを、自らに語らせれば、

左に算勘右に筆、脊に風呂敷足には草鞋、異形に出たちかけあるき、いらざる口をきくものから、つまらぬことに日間をかき、頼まぬ用も安請合、いそがば作もいそがるゝ、時刻にいたれば埒あかぬ、其たゞ中へわけて亦、此注文は大急ぎ、画著の出来今日中と、前後つかへし紙数も、わづか十枚、十月の中の十日に一時あまり、溪斎主人と

机をならべ（文政七、園の雪花魁序）

と。これには三馬風の誇張も混るであろうが、そうして出来た粗雑さと、合作と称して、他人の作に署名することとの悪評が、漸くに高まって来た。絵本荒川仁勇伝（梅児誉美補注一一参照）序は、その間の事情を物語るし、人情本の名声を得て後も、文政期には門人まかせにして粗末な作があったが、吾嬬春雨以後は自作であるなどと、度々に言訳しているのも亦、この期のこの悪評のためである。そうした批難に対して、もし作者たるべきなら、春水は何らか、善処しなければならぬ。先ず、通油町に転じ、丁子車を売出し、出版業を消極的にし、漸々と態勢を整えて、文政十二年には、本当に作者として立つべく、一念発起し、二世楚満人をやめて、四沢をうるおす春の水、為永春水と号した。

同年刊の合巻、繫馬七勇婦伝四編の為永春水と署した自序に、

古人の糟粕は喰ふとも、今人の自慢を密奪で舐る事を嗜まず、不知は不識にて、為の字さるの花押はすれど、人の真似をば為気なく、衆人尙みな不酔なりせば、我は醒ざる扁屈原、独酌の宿酔は、静座の臍物、山茶も煮花、口取いらぬ繫馬、二世との唱へも氣にくはぬ、正銘作者の其一人

と、人のを盗まず、古人の跡をもおそわぬと自立を宣言した。同年の玉川日記五編の珍奇楼の端書には、「我友狂訓亭、娘八丈の古衣を洗たくし、復古の人情に流行をそえてより、（中略）実累年の中本誦本、都鄙の貴賤がもてはやして、（中略）賤が伏屋の小筵にも、楚満人の作物必ず開け、どくいつと共にはやれど」と、彼の作者経歴をあげ、「今年其名も更つ。為永春水と和けて、婦女子の為に教示の滑稽、水解弥新なり」と、彼の志を示し、「只此人の随意をいはゞ、玉の盃手にもふれ得ず、お出なんしは好め共、来給への招は敬して行ず、面白からぬ性質也」と、その生真面目な性格をも紹介した。春水は、今までの経験をもとにして、いよいよ作者の道を立てようと覚悟したはずである。がその最初の年、文政十二年の大火にあって、一身を田舎へ引込めて、先ずふりかかった災難を払わねばならなかった。

四

金竜山下に住して、金竜山人と号したことは、天保三年の著述から見えるので、天保初年のことであろう。その金竜山下とは、戯作者考補遺によると、浅草寺内であった。文政十二年から天保三年まで、既に原稿が火事以前に出来ていたかと思われる、文政十三年刊の十杉伝・阪東水滸伝と、なお奥付に通油町越前屋長次郎とあって、早く板になったらしい寢覚繰言三・四編が同年に出た以外は、三馬の潮来府志後編に序を送ったのみで、何の著述も出さなかった。まるのやかく子なる著者の中には、彼も一枚加わっているという（八笑人三編追加広告秋雨夜話を、小説年表類は天保二年刊に登記するが、初編はもっと以前であるし、少くともこの間の作とはされないようである。

生活の方針も打立て、作者的情熱ももえ上るものもあった。その関頭に出合った災難は、真面目な一面を持つ彼だけに苦痛であったが、作者としては幸となったと考えられよう。一種のこの断頭台に立った彼が、生きるために持ったものは、たとえ拙なりといえど、執筆の腕一本であることに気付いたことであろう。小説を書くしか方途はない。都心を去って、かえって俗事にわずらわされぬ小屋で、作者道に精進せざるを得なかった。吾嬭春雨前編（天保三）を試作として、梅兒誉美初・後編を、後年自ら言う如く（春曉八幡佳年四輯、門人を用いず自力で著述・刊行したのは天保三年のことであった。寢覚繰言でも共同した柳川重信が、挿絵を、しかも口絵は合巻のように、人気俳優の似顔でかいてくれた。それが好評を得、同四年には三・四編をもつて完結する。以前の同業者・連名者であった馬喰町二丁目の西村屋与八と、京橋弥左衛門町の大嶋屋伝右エ門が出版を引受けた。それが、満都の、そして長く全日本の青年達の愛読書となろうとは、春水自らも思いがけなかったであろう。米八と仇吉の錦絵が出たり（春宵月の梅三）、あやかっって名古屋の芸者が、米吉と名をかえたり（梅美婦称二編）する。深川芸者の会話の中にも、「丁度、米八のようだ」というような文句が出る（春曉八幡佳年三輯）ありさま。前に田舎源氏、後に金色夜叉を思い出させる流行である。その好評の秘密は、期せずして、落